

校長先生の子どものころのお話 第1回

4月17日（金）

お願い：低学年の子どもたちには少しむずかしいかもしれませんが、お家の人と読んでみてください。

ださい。

*『冷凍（れいとう）みかん』～夏休みの思い出～ *

校長 寺本 喜和

給食のメニューに「冷凍みかん」が出たことがあります。上ノ原小学校だったか、前の学校だったか忘れてしまいましたが、この話はその時に思い出したお話です。

学校の給食では「検食（けんしょく）」と言って、全校の皆さんに給食を配る前に、校長先生か副校長先生が必ずその日の給食を食べて、味や調理のよしあしを確認しなければならないことになっています。ですから校長先生はいつも、給食の時間が11時半から12時の間なのです。（4時間目のころ）この日も、校長室で検食をしました。

いつものようにテーブル上におかれたおぼんには、スープやパンなどとともに、なんと冷凍みかんがあるではありませんか。手に取ってみると、まだこおっていて少しかためでした。ですから、先にパンやおかずなどから手をつけることにして、しばらくたってからもう一度手に取りました。その頃にはほどよくとけていて、手でらくにかかわむくことができました。みかんの袋をひとつ取りはずして、口に入れると、それはシャーベットのようです。甘酸っぱい味と香りが口の中いっぱい広がって何とも言えないおいしさでした。その時「冷凍みかん」に関係した子どものころの思い出がよみがえってきました。

たぶんそれは小学校4年生のときでした。夏休みに入って、家族で生まれて初めて海水浴（かいすいよく）につれて行ってもらいました。「海水浴」ってみんなはわかりますか。一日中海水浴場というビーチですごし、子どもたちは暑い時間には海に入って泳いだりもぐったりして遊んだものです。そのころ、校長先生の家はあまり裕福ではなかったせいもあり、夏休みといっても遠出をすることはあまりなかったので、出かける前からとてもワクワクしていました。しかも初めて経験する海です。そのうれしさと言ったらありません。

大きな駅から電車に乗って出かけました。駅で母が、「今日は弁当を買って食べようか」と言い、駅のホームにある売店で駅弁を買うことになりました。いくつかの駅弁の中から、私はいつものようにいちばん値段が安いのをえらびました。親にむだづかいさせたくないと考える子どもでしたから。母はそんな私を見て「それじゃ、そのお弁当といっしょに、お茶と冷凍みかんを買ってあげるよ。」



と言いました。この言葉に、天にもものぼる気持ちだったのをおぼえています。「盆と正月がいっしょにやって来た」とはこのことだと思いました。買ったものを持って電車に乗りこみました。4人がけの向かい合わせの座席に家族ですわり、席の横についた小さなテーブルの上にお茶と冷凍みかん、ひざの上にお弁当を広げ、食事の開始です。

冷凍みかんは一袋4個入りでかちかちにこおっていました。テーブルの上にはしばらく置いておくと、真夏のことでしたから、すぐにとけ始め、テーブルの上にはとけた水分が広がってきました。お弁当を食べ終わったころ、冷凍みかんをひとつもらいました。私にとって初めての冷凍みかんでした。皮をむくときの手の冷たさ、ひとつ口に入れて冷たさとすっぱさが口に広がった時のさわやかな味。とてもおいしいものだと感じました。こんなおいしいものがこの世にあるのか、と感じたほどです。

校長室で検食をしながら、冷凍みかんの思い出は、私にとって家族とすごした、とっておきの一日の思い出だと気づきました。決して豪華な旅行とは言えないでしょうが、みんなで出かけた夏休みの一日の中で、今でもふと思い出す特別な食べ物となりました。そういえば、海水浴でとめたもらった親戚の家は、古いけれど大きな家で、開けはなした障子の先に青い海が見えていたこと、海水浴をした午後に皆で座敷で昼寝をしたこと、セミの鳴き声がずうっと聞こえていたこと、昼寝の後に食べさせてもらった冷やしたスイカがとてもおいしかったことなどの思い出を、今でもはっきりと覚えています。

